各　位

2025 年 2 月 13 日
株式会社 山と溪谷社
https://www.yamakei.co.jp/

身近な昆虫の感動ベストセレクション、『昆虫のふしぎ発見図鑑　近所の虫のすごさコレクション』発刊！

インプレスグループで山岳・自然分野のメディア事業を手がける株式会社山と溪谷社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：二宮宏文）は、『昆虫のふしぎ発見図鑑　近所の虫のすごさコレクション』（写真・文　安田守）を 2 月 14 日に刊行します。

大ベストセラー『イモムシハンドブック』の著者が、
身近な昆虫の知られざる姿と驚くべき生きざまの数々を、実物大の写真を中心にグラフィカルに紹介！

生きもの写真家の安田守さんの視点で集められた、身近な昆虫のすごいところ、おもしろいところを、「赤ちゃん」「顔」「ふん」「ぬけがら」「擬態」など、さまざまなテーマごとにふんだんに紹介しています。

「すごい虫」というと、海外にいるめずらしい昆虫や派手な昆虫に目が行きがちかもしれません。でも私たちのすぐそばで生きている昆虫にだって、じつは「すごい！」と感心するポイントがたくさんあります。

ページを繰る度に、多彩で生き生きとした虫たちの姿や生きざまに圧倒され、身近な虫の思いがけないすごさに気づかされます。虫が一生のあいだに残したものを集めて、虫の一生に近づく試み、題して「一生集めプロジェクト」も必見です。

本文はすべてルビつきで小学生から読むことができます。

春 Spring

春。いつもは通り過ぎるだけだったクリの木の枝先に、クルクルとまかれた葉を見つけた。近くをさがしてみると、オレンジ色に黒い点をつけた小さな虫が、全身を使って葉をまいていた（写真）。ゴマダラオトシブミというオトシブミの仲間だった。

別の日、同じクリの木でまた葉をまいている虫を発見。今度は黒と赤のナミオトシブミという種類。こうなってくると、クリの木のそばを通るたびに、まかれた葉やそれを作っている虫が何か見つかるのではと、気になってしまう。ある日はコナライクビチョッキリとミヤマイクビチョッキリという種類が、また別の日には、ゴマダラオトシブミがまいた葉にもぐりこむオオメイクビチョッキリという変わった種類も見つかった。

いつもの散歩コースは、すっかり「オトシブミコース」となり、歩くたびにオトシブミについての新しい発見が生まれ、コレクションがひとつずつ増えていった。

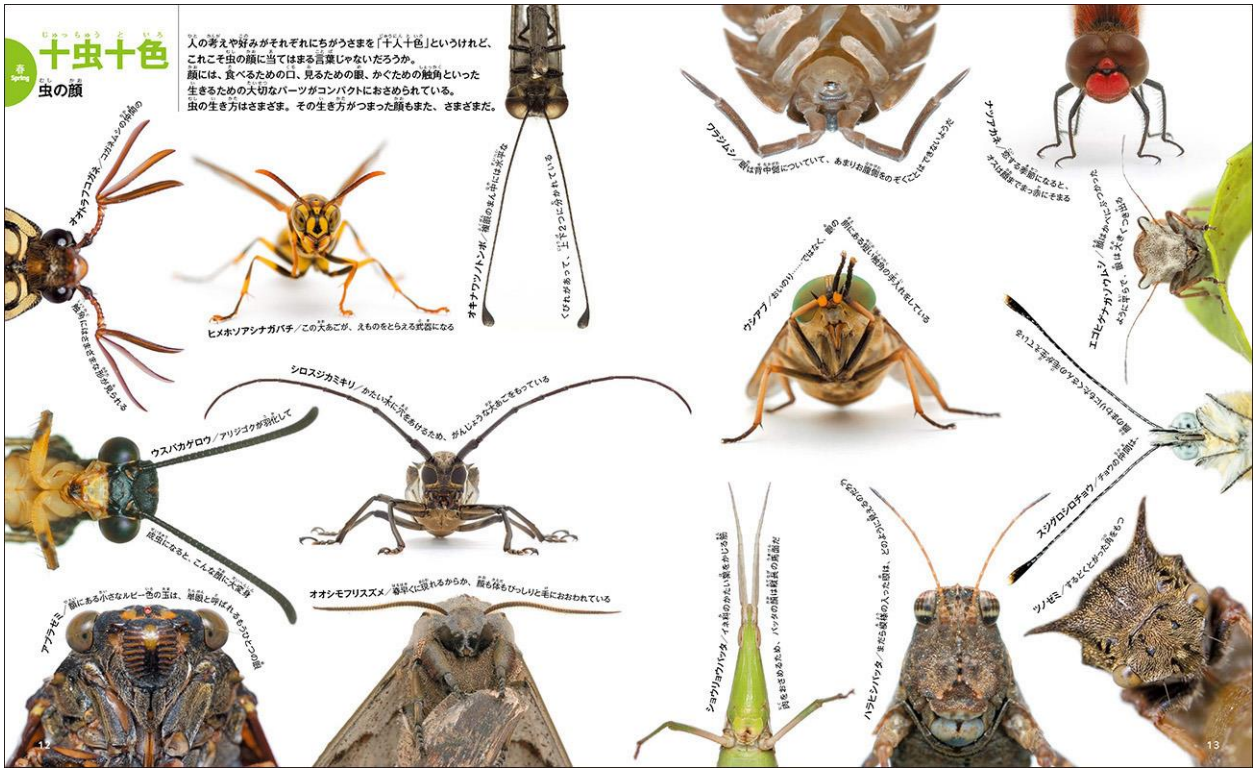
この本でお見せしたいのは、僕が近所でたまたま出会い、気になってさがし歩くようになり、小さな発見をし、不思議さを感じているうちに集まった、そんな虫たちのコレクションだ。

季節の始まり。春の昆虫コレクション。

クリの葉をまくゴマダラオトシブミ▶

4

5



春 Spring 十虫十色

虫の顔

人の考えや好みがそれぞれにちがうさまを「十人十色」というけれど、これこそ虫の顔に当てはまる言葉じゃないだろうか。顔には、食べるための口、見るための眼、かぐための触角といった生きるための大切なパーツがコンパクトにおさめられている。虫の生き方はさまざま。その生き方がつまった顔もまた、さまざまだ。

オオトラフコガネ／コガネムシの仲間の顔には多様な部分が見られる

ヒメホソアシナガバチ／この大あごが、えものをとらえる武器になる

オキナワツノトンボ／前頭の先人形には深淵なくぼみがあって、ここに何が入っているのかは不明

ウラジロ／敵は背中側についていて、あまりお腹側をのぞくことはできないようだ

ハナアブ／成虫で長期になると、オスは顔全体が赤くなる

ウシアブ／さいのう……ではなく、命の源である脳（脳幹）の形を表している

エゴヒゲナガウワバ／幼虫はかべにとまっていると、まるで枯れ枝のように見えて、鳥は天敵からの目をのがれる

シロスジカミキリ／かたい甲羅に穴をあけるため、がんじょうなあごをもっている

ウスバカゲロウ／アリジゴクが羽化して成虫になると、こんな顔に変身

アブラゼミ／顔にある小さなルビー色の玉は、単眼と呼ばれるもので、ピントの調節はできない

オオシモフリスズメ／暗闇に隠れるからか、顔も体もびっしりと毛におおわれている

ショウリョウバッタ／イネ科のかたい葉をかじる顔

ハラヒシバッタ／葉だけを食べるこの顔は、バッタの顔の最古型の顔だ

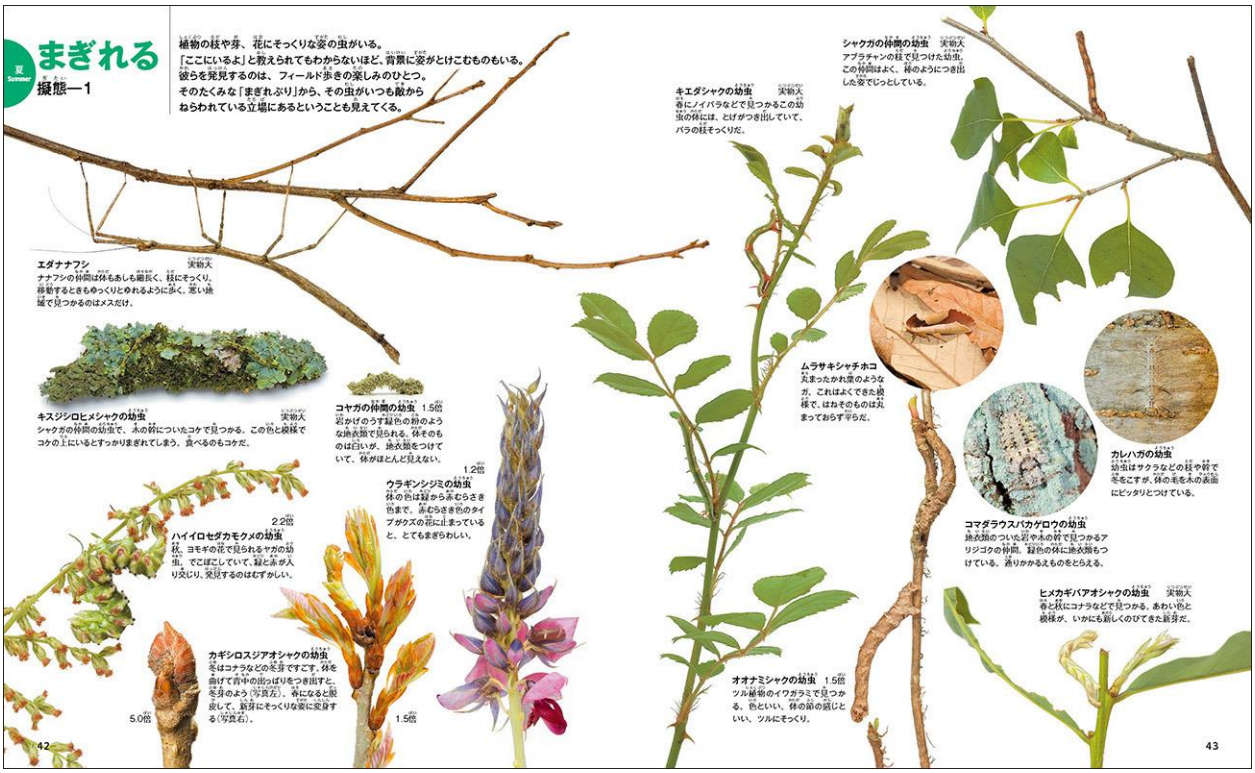
スジグロシロチョウ／チョウの顔は、ぐるぐるのまき毛になっている

ツノゼミ／すると、とがった角をもつ

12

13

春 Spring
静かな大変身
さなぎ
せかせか、ちょこまか、パタパタ、ブンブン。
せわしなく動いている虫たちだが、さなぎのときだけは別。
まるで死んでしまったかのように動くこともなく、静かな時間を過ごす。
ところがその内部では、幼虫から成虫へと
体のしくみをすっかり変えるために、急ピッチで大工事中なのだ。
はばたく前の静かな大変身の時間。
イッポンセスジスズメ 実物大
あたたかい地方で見られるスズメガで、幼虫はサトイモなどの葉を食べる。葉を見ただけでさなぎになった。
ウスベニヒゲナガ 3倍
5-7月に現れる、触角の長いガ。体の黒褐色の長さの触角が、どう体の末のりに何度にもまかれている。
ジャコウアゲハ 1.5倍
アゲハチョウの仲間のさなぎ。手を後ろでしばられた人の姿にも見え、これが「お菊」というのうれいの姿に似ていることから、「お菊虫」とも呼ばれる。
スミナガシ 1.5倍
下向きにぶら下がるこのさなぎは、かれたような色で、すじ模様があり、青中には穴まであいている。まるで枯に残ったかれ葉のようだ。
エントツドロバチ 2倍
どろの巣の中のさなぎ。すき通った部分には、まだ成虫の体ができていない。（→27ページ）
カブトムシ 実物大
土の中に部屋を作り、そこでさなぎになる。成虫の体ができあがった部分は黒っぽく見える。
ヒゲナガオトシブミ 4倍
母親が作った枝巻の中でさなぎになる。頭部が長いこのさなぎはオスだ。（→24ページ）
ヒメドシチョウ 実物大
幼虫はエノキやヤナギ類の葉を食べる。幼虫が発生した木のまわりでは、あちこちにさなぎが見つかる。
ウスバカゲロウ 3倍
大きくなった幼虫（アリジゴク）は砂にもぐり、ボール形のまゆを作り、その中でさなぎになる。大あごを開いたり閉じたり、さなぎではめずらしくよく動く。（→55ページ）
テングチョウ 3倍
幼虫の葉や枝などにおりの先でぶら下がってさなぎになる。写真はさなぎになったばかりで、よくすけて見える。（→6ページ）
シモフリスズメ 1.5倍
成虫の長いびになる出っぱりが、頭の部分（左上）にある。幼虫はクサギやネズミモチなどの葉を食べ、土にもぐってさなぎになる。
ヤマトシジミ 2倍
ふつうに見られる小さなシジミチョウ。さなぎの体はあみのある緑色で、部分的に毛が生えている。
モンシロチョウ 1.5倍
このさなぎは、キャベツ畑の近くに置かれた紙ぶくろにくっついていた。
クスサン 実物大
「スカシダワラ」と呼ばれるあらいあみ目状のまゆの中でさなぎになる。（→17ページ）
ヒメヤママユ 実物大
目の細かいあみ目状のまゆの中でさなぎになる。顔をかこむマフラーのように見えるのは、成虫の触角になる部分。（→17ページ）
ベニシジミ 2倍
かれ葉などに細い糸をかけてさなぎになる。シジミチョウのさなぎは、コロンとした形が多い。（→16ページ）
オオナミシャク 1.5倍
シャクガの仲間のさなぎ。ガのさなぎには、このようにお腹を曲げ、ひょこひょこ動かすものがいる。
アイノミドリシジミ 2倍
成虫は緑色にかがやく美しいはねをもつチョウだが、さなぎのときはとても地味な色合い。
カメノコテントウ 2倍
大形テントウムシで、幼虫はクルミハムシの幼虫などを食べる。おしりにぬいだ皮がついている。
アゲハ（ナミアゲハ） 1.5倍
緑 色のものもある。さなぎの色は、少し前の時期の、まわりの環境によって決まるといわれる。（→16ページ）
キアゲハ 1.5倍
ナミアゲハのさなぎに似ているが、背面の出っぱりが小さい。色は茶色と緑色がある。（→8ページ）
オナガアゲハ 1.5倍
幼虫が葉を食べるカラタケなどの枝でさなぎになると、周囲にとけこんで見つけにくい。
クロアゲハ 1.5倍
お腹が横に広がる部。幼虫が食べるミカン、カラスサンショウなどの近くで見つかる。
28
29


夏 Summer
まぎれる
擬態―1
植物の枝や葉、花にそっくりな姿の虫がいる。
「ここにいるよ」と教えられてもわからないほど、背景に姿がとけこむものもいる。
彼らを発見するのは、フィールド歩きの楽しみのひとつ。
そのたくみな「まぎれ ぶり」から、その虫がいつも敵から
ねらわれている立場にあるということも見えてくる。
エダナナフシ 実物大
ナナフシの仲間は体もあしも細長く、枝にそっくり。移動するときもゆっくりとゆれるように歩く。蒸い地域で見つかるのはメスだけ。
キスジシロヒメシャクの幼虫 実物大
シャクガの仲間の幼虫で、木の幹についたコケで見つかる。この色と模様でコケの上にいるとすっかりまぎれてしまう。食べるのもコケだ。
コヤガの仲間の幼虫 1.5倍
岩かげのうす緑色の粉のような地衣類で見られる。体そのものは白いが、地衣類をつけていて、体がほとんど見えない。
ハイイロセダカモクメの幼虫 2.2倍
秋、ヨモギの花で見られるガの幼虫。でこぼこしていて、緑と赤が入り交じり、発見するのはむずかしい。
ウラギンシジミの幼虫 1.2倍
体の色は緑から赤むらさき色まで。赤むらさき色のタイプがクズの花に止まっていると、とてもまぎらわしい。
カギシロスジアオシャクの幼虫
冬はコナラなどの冬芽ですごす。体を曲げて背中の出っぱりをつき出すと、冬芽のよう（写真左）。春になると脱皮して、新芽にそっくりな姿に変身する（写真右）。
5.0倍
1.5倍
キエダシャクの幼虫 実物大
春にノイバラなどで見つかるこの幼虫の体には、とげがつき出していて、バラの枝そっくりだ。
シャクガの仲間の幼虫 実物大
アブラチャンの枝で見つけた幼虫。この仲間はよく、葉のようにつき出した姿でじっとしている。
ムラサキシャチホコ
丸まったかれ葉のような、これはよくできた模様で、はねそのものは丸まっておらず平らだ。
カレハガの幼虫
幼虫はサクラなどの枝や幹で冬をこすが、体の毛を木の表面にピッタリとつけている。
コマダラウスバカゲロウの幼虫
地衣類のついた岩や木の幹で見つかるアリジゴクの仲間。緑色の体に地衣類をつけている。通りかかるえものをとらえる。
ヒメカギバアオシャクの幼虫 実物大
春と秋にコナラなどで見つかる。あわい色と模様が、いかにも新しくのびてきた新芽だ。
オオナミシャクの幼虫 1.5倍
ツル植物のイワガラミで見つかる。色といい、体の節の感じといい、ツルにそっくり。
42
43

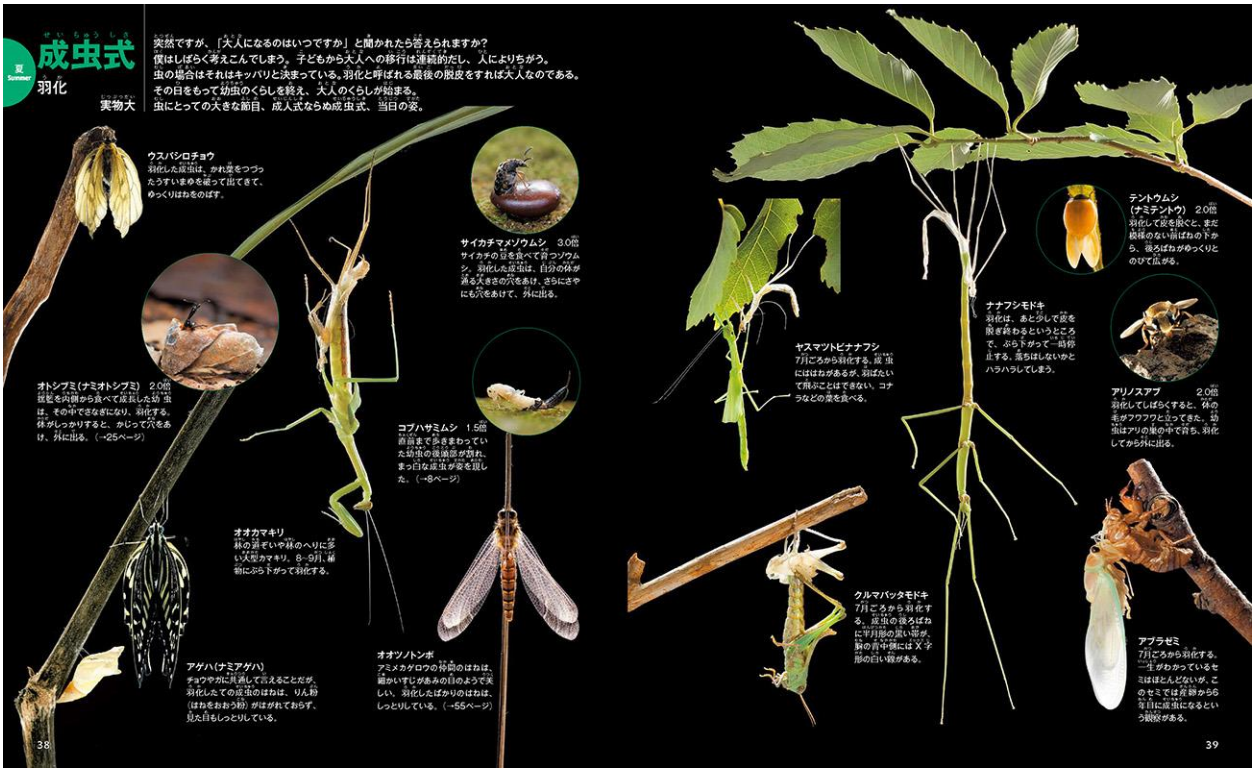
夏 Summer

成虫式

羽化

実物大

突然ですが、「大人になるのはいつですか」と聞かれたら答えられますか?
僕はしばらく考えこんでしまう。子どもから大人への移行は連続的だし、人によりちがう。
虫の場合はそれはキッパリと決まっている。羽化と呼ばれる最後の脱皮をすれば大人なのである。
その日をもって幼虫のくらしを終え、大人のくらしが始まる。
虫にとっての大きな節目、成人式ならぬ成虫式、当日の姿。



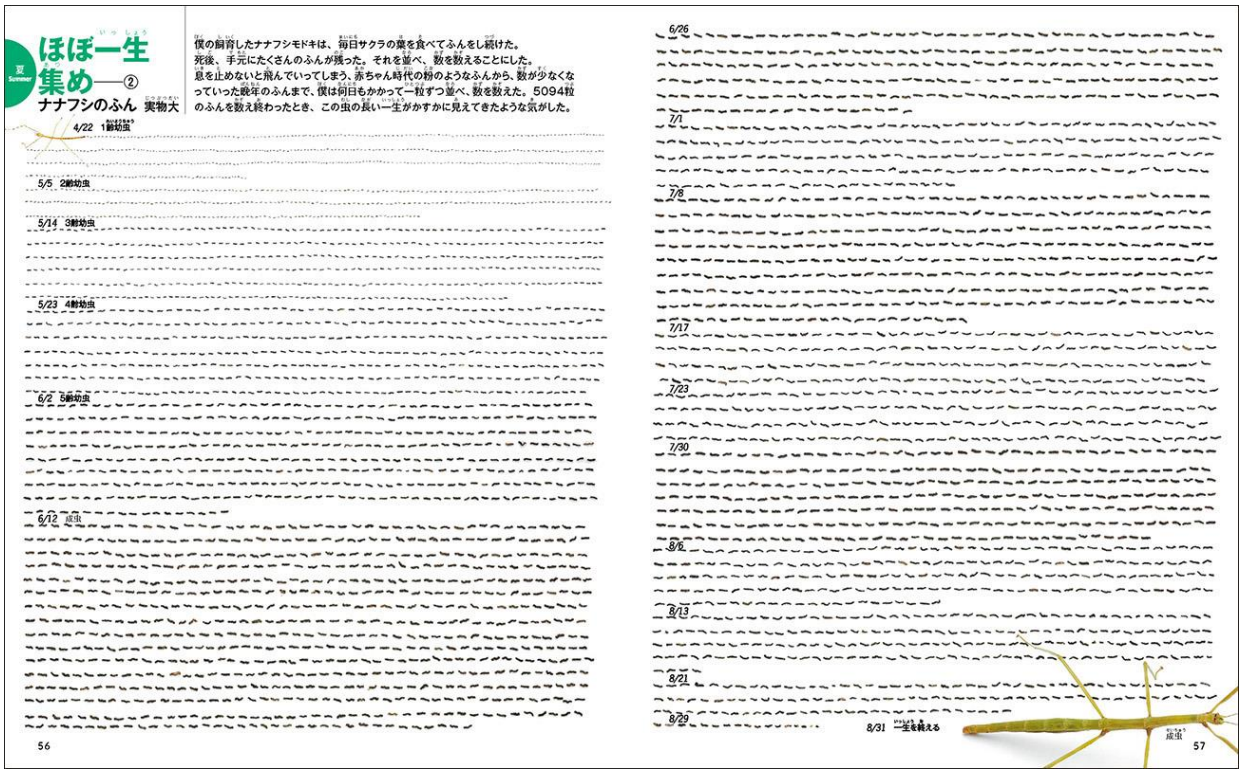
夏 Summer

ほぼ一生集め——②

ナナフシのふん

実物大

僕の飼育したナナフシモドキは、毎日サクラの葉を食べてふんをし続けた。
死後、手元にたくさんのふんが残った。それを並べ、数を数えることにした。
息を止めないと飛んでいってしまう、赤ちゃん時代の粉のようなふんから、数が少なくなっていった晩年のふんまで、僕は何日もかかって一粒ずつ並べ、数を数えた。5094粒のふんを数え続けたとき、この虫の長い一生がかすかに見えてきたような気がした。



秋 Autumn

木の葉が秋色にそまっていくころ、虫たちの鳴かれはさびしくなってくる。そんなシーズン終わりぎわの雑木林で、ウスタビガのペアに出会う。

燃えるようなオレンジをまとったオスと、ずんぐりした体にさわやかなイエローをまとったメスが、まゆをはさんで対称の形をつくる(写真)。僕は、いつまでもそのままの2匹の前で、秋の日を過ごす。

高校で理科の教員をしていたころ、ある生徒が授業のあとで書いてくれた文章を思い出す。

「カマキリにはカマキリの世界があって、すごい数のカマキリや、もっとちがうカマキリの先祖の虫が生きていたから、今のカマキリがある。この地球の上にはすごい数の生命がいる。その一つ一つがすごく大きなものを背負っている」

昆虫は鳥に食べられるなど、成虫の途中で死にやすく、子孫を残せるのはほんのわずかだ。かろうじて生きのびたウスタビガのオスとメスが子孫を残す。それがとぎれずに何百年、何千年とつづいてきたから、今もウスタビガがいる。彼女の言葉を借りるなら、この日出会ったウスタビガのペアは、すごい数の生命の先に現れた奇跡的な2匹なのだ。

ウスタビガは、僕の家から15分のフィールドで会うことができる。昆虫は、僕たちの日常のすぐそばで生きている野生生物だ。

笑りとバトンタッチ。秋の昆虫コレクション。

森の縁わりの雑木林で、交尾するウスタビガのペア▶

究極の愛 Winter

コブハサミムシ

ほとんどの虫たちがじっとしている冬空の下、卵を産んで子育てをする虫がいる。コブハサミムシのメスはその間、谷ぞいの石の下やたおれた木に作られた小部屋の中で、数十個の卵を産み、世話を続ける。それも、飲まず食わずで。やがて子どもたちがふ化をする。春はもう少し先、えさになりそうなものは、まだほとんどない。母親はその最後に、おどろくべき方法で子どもたちの命をつなぐ。

コブハサミムシ 3倍
オスのハサミ(尾角)には2つの型があり、強く曲がったものをアルマン型、長くて曲がりの弱いものをルイス型と呼ぶ。メスのハサミはより細く、先がとがる。

オス(ルイス型)　オス(アルマン型)　メス

①コブハサミムシのオスとメスの交尾。ハサミがあるため、腹をねじった姿勢でおこなう。オスは、メスが産卵すると巣を出て行き、幼虫がふ化するころには死んでしまう。

②数分に1個のペースで、60～100個の卵を産む。卵は直径0.9mmほどの楕円形で、ツルツルして光沢がある。メスは産み落とした卵を1個ずつくわえて運び、ほかの卵とともにまとめる。

③卵の世話はメスが1匹で行なう。表面をなめてきれいにし、こまめに位置を入れかえる。卵がふ化するまでの間、メスは飲まず食わずで世話をしつづける。

④石の下で卵をかかえるメスたち。条件のよい場所では、共同アパートのように、何匹ものメスがそれぞれの部屋を作る。天気がいい日は、石があたためられ、部屋も少しあたたかくなる。

⑤卵の期間は約80日で、温度によって長くなったり短くなったりする。室内の飼育下では、産卵から1か月後、卵の中の幼虫の眼やアゴがすけて見えるようになってくる。ふ化は近い。

⑥幼虫は、ほぼいっせいにふ化する。卵のからを破り、頭、胸、脚、あし、腹の順にからの外に出てきた。あとはおしりとハサミがぬければ、コブハサミムシの赤ちゃんが誕生する。

⑦生まれたての1齢幼虫。腹の先にはちゃんとハサミのようなものがそなわっている。体もあしもすき通ったミルク色で弱々しいが、体がかたくなるにつれて、色がこくなっていく。

⑧母親はふ化した幼虫におおいかぶさり、はなれようとする幼虫を追いもどしたりして、世話を続ける。食べ物はほとんどない。お腹をすかせた幼虫たちは、ついに母親の体を食べはじめる。

⑨死んだ母親の体を食べるのではなく、まだ生きている母親を食べてしまう。母親は、食いつく子どもたちをこばみもせず、ただじっとしている。母親はやがて死に、体は幼虫たちに食べつくされる。

⑩幼虫たちは、しばらくすると巣をはなれ、1匹でくらしはじめる。母親の体を食べた幼虫は、生きのびる率が高まるという。この行動は、成長が始まる時期の食べ物不足を補うためのものと考えられている。

＊本書は 2007 年 8 月に発刊された『森の休日 5 集めて楽しむ昆虫コレクション』を子どもも大人も楽しめるように大幅に改稿したものです。

〇著者について

安田守（やすだ・まもる）

中・高校で理科教員を勤めた後、生きもの写真家に。長野県南部の伊那谷を拠点として、身近な昆虫をはじめとする生きものを撮影し、一般書や児童書をつくっている。
主な著書に『イモムシハンドブック』『オトシブミハンドブック』『新訂冬虫夏草ハンドブック』『哺乳類のフィールドサイン観察ガイド』『イモムシの教科書』（文一総合出版）『うまれたよ！モンシロチョウ』『うまれたよ！ナナフシ』『りんごって、どんなくだもの？』（岩崎書店）『ずら～りイモムシならべてみると…』（アリス館）『虫のぬけがら図鑑』（ベレ出版）『ぜんぶわかる！ジャガイモ』（ポプラ社）など。

〇書誌データ

書名：**昆虫のふしぎ発見図鑑　近所の虫のすごさコレクション**

著者：安田守

発売日：2025 年 2 月 14 日

定価：1980 円（本体 1800 円＋税 10%）

96 ページ／AB 版／4 色刷

https://www.yamakei.co.jp/products/2824063660.html

【山と溪谷社】 https://www.yamakei.co.jp/

1930 年創業。月刊誌『山と溪谷』を中心とした山岳・自然科学・アウトドア・ライフスタイル・健康関連の出版事業のほか、ネットメディア・サービスを展開しています。
さらに、登山やアウトドアをテーマに、企業や自治体と共に地域の活性化をめざすソリューション事業にも取り組んでいます。

【インプレスグループ】 https://www.impressholdings.com/

株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証スタンダード市場 9479）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社山と溪谷社　担当：井澤健輔
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-105　神保町三井ビルディング
TEL03-6744-1900　E-mail: info@yamakei.co.jp
https://www.yamakei.co.jp/